NPO法人 子育て応援
かさぐるま

子育て通信 64 号

札幌市中央区大通西 27 丁目 1-1 円山バスターミナル 2F
てんてん 011-676-3387 ／ 受付問合 090-3117-2294
kazaguruma@oasis.ocn.ne.jp
発行責任者　代表理事　山田智子
【2024.1.1 発行】

あけましておめでとうございます！　みんなが笑顔で健やかに暮らせる1年でありますように♪

昨年は、6 月末期限の「子育て拠点てんてん」の転居先が 4 月中旬まで決まらず、てんてんを利用するみなさんにはご心配をおかけしました。また、転居先決定後は、新てんてんの改修工事＆環境整備に向けての寄付のお願いに、新旧の利用者はじめ所縁あるみなさんがいち早くご協力くださり、本当に本当に助けられました。心よりお礼申し上げます！おかげさまで、新てんてんでは少しずつ環境が整い、暖かな部屋で子どもたちの賑やかな声がこだましています。

財政的に厳しい状況は今後も続くと思われますが、地域の親子のため、また日本社会の子育てを豊かにしていくため、一つひとつの活動のなお一層の充実を目指していきますので、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、こども家庭庁では 2026 年度から、親の就労の有無に関係なく保育サービスを利用できる「こども誰でも通園制度」が本格実施するようです。同制度にはかざぐるまが行う子育て拠点てんてんでの「預かり保育」や2歳児の森のようちえん「トコトコくらぶ」も該当するようで、国への意見書にも明記されました。後は基礎自治体である札幌市の判断となりますので、利用者のみなさんが利用しやすく子育てがより豊かになるように、それと同時に子育て支援団体も安定的に活動を継続できるように、引き続き札幌市へ働きかけていきたいと思います。　　代表理事　山田智子、スタッフ一同

●寄付金報告

期間：2023 年 6 月～12 月末　**方法：**手渡し・振込み　**寄付者数：**215 人　**総額：現金 2,696,100 円＋授乳室取付け**
活用：新てんてん改修工事＋ガスストーブ・エアコン＋窓・玄関看板＋コート掛けステンレス棒＋木製滑り台＋掃除機など

●てんてんトピックス【12 月】

○円山バスターミナルの窓は一重窓で隙間風が寒かったので、札幌市子ども未来局が内窓を取り付けてくれました。
○玄関の土間の上の天井からステンレス棒を吊り下げ、雪に濡れたスノーウエアを干せるようにしました。
○札幌大谷大学子育て支援センター「んぐまーま」と同じ木製滑り台を購入しました。早速、子どもたちに大人気です♪

2024 年度 2 歳児の森のようちえん「トコトコくらぶ」15 期のご案内

「トコトコくらぶ」は、円山原生林の四季折々の自然とのふれあいや集団生活を通して個々の子どものこころとからだの発達を促すことを目的に、満2才児を対象に週 1 回 3 時間、年間 40 回、保護者と離れて保育者や友だちと一緒に森を散策する活動として 2010 年度より 14 年間継続して行っています（12 人×火・水・金曜日 3 クラス）。「トコトコくらぶ」の活動は、これからの長い人生を生き抜くためのしっかりした体幹と基本的な生活習慣を育て、自己肯定感や他者への信頼感、感情を調整する力、粘り強くやり抜く力などの生きる力（＝非認知的能力）を育むことにつながっていると実感します。

15 期も森の入口集合・解散とし、4 月から 5 月 1 週目と 11 月以降は 10～12 時の 2 時間、5 月 2 週目から 10 月末までは 10～13 時の 3 時間を森の中で活動します。興味のある方は HP から説明会資料をダウンロードしてご確認ください。てんてんでもお渡しできます。受付は 1月 15 日（月）10 時開始です。**問合先：kazaguruma@oasis.ocn.ne.jp（担当山田）**

てんてん寺子屋学習会報告

川田　学（北海道大学子ども発達臨床研究センター准教授、かざぐるま理事）

てんてん寺子屋学習会は、子育て中の親たちでの座談会形式のしゃべり場です。今年度は 7 月に円山バスターミナルに移転してから、9 月と 10 月に 0～1 歳児編、2～3 歳児編、パパ寺子屋の 3 回開催しました。新てんてんは部屋が1つのため、スタッフの見守りの中で子どもたちも周囲で遊びながらゆるやかに参加していました。

今年の寺子屋で印象に残っているのは、妊婦さんの参加があったことと、ママからもパパからもとても積極的な語りや質問が多く飛び出していたということです。子どもが誕生してからは、24 時間 365 日の休みない子育てに入っていきますので、出産以前から子育てや子どもにまつわることを耳にしながら、**自分なりに考えを豊かにしておく**ことは大切ではないでしょうか。子育てや教育は、ときに大人の思いこみや考えすぎで親も子も苦しくなってしまうことがあるので、**いろいろな人の意見や経験を心を平らにして聴いておく**と、ふとしたときに「そういえば…」と思いだすことができるかもしれません。

寺子屋でよくお話しする内容に、子どもの発達というのは、“竹の節づくり”のようなものというたとえがあります（かざぐるま発行『**子育て応援ブック**』の **31 頁**）。北海道は竹が少ないので道産子の方はイメージしにくいかもしれませんが、しなやかに高く育った竹は、根元の方は節が細かくつまっていて、上に行けば行くほど節の間隔が空いています。竹の生長の仕方を子どもに当てはめてみると、幼い時期には短い期間に多くの“発達の節”があるということになります。**“発達の節”**には、どの子にもある程度の共通性があります。はいはいが必要な時期には、しっかりはいはいできる環境を子どもに与えることが大事ですし、何かに関心を示したときに「○○いるね」「何してるのかな」と穏やかに声をかけて、子どもの視線の先を共有するコミュニケーションが、子どもにたくさんの気づきやことばの学びを促すことでしょう。『子育て応援ブック』なども参考にしていただきながら、**幼い時期の発達の節を大切に**していただけると、幼児期以降の節はゆるやかになり、ゆるやかになることでしなやかになっていきます。

一方で、大人にとって思い出が宝物であるように、子どもそれぞれの経験はかけがえのないものです。私はこれを**“できごとの節”**と呼んでいます。毎年の寺子屋で出てくる悩みとして、下の子の誕生にともなう上の子と親との葛藤があります。こうした場合にかぎらず、私は**親子がときどき“デート”**をすることが大切ではないかと思っています。ふだんの生活は流れていきがちです。また行事は良い思い出にもなりますが、やや慌ただしいこともあります。その中間にあるのがデートです。日常の中の非日常。「～しなければ」という呪縛を解いて、ただ「楽しむ」ことだけを目的にした行動を共にするということです。家族みんなでお出かけではなく、一人の親と一人の子どもでのおでかけです。そうした**おだやかな経験の共有**が、子どもの心を軽くして、スッと思い出のポケットに入ることがあるように思います。
こうした日常の何気ない、でもかけがえのない経験ができごとの節となって、子どもたちの**“じぶんづくり”を支える**のでないかと考えています。

さて、ここ数年、パパ寺子屋が熱いです（笑）。子育ての新しい時代がやってきていることを実感しています。そこで、**新年の 3 月 10 日（日）には、今年度 2 回目のパパ寺子屋を開催予定**です。ぜひふるってご参加ください。申込みは 2 月 13 日（火）よりてんてん掲示板にて。それではみなさん、よいお年を！

●寄付者のお名前（敬称略）　心から感謝いたします！どうもありがとうございました

藤澤昇平、岩久建志、山本周平・祥子、鈴木野原、松田妙子、田中住幸、川上麻美、粟津啓子・久美子、大塚愛美、飛塚里奈、松崎悦子、坂口ともみ、汐見稔幸、奥山千鶴子、井手彩集、田中睦子、NPO 法人チャレンジド、高島亜矢子、宇波由香里、加納尚明、和田興佳・絵理、北岡千絵、東重満、白川美穂、山崎寛子、原絵理、森麻耶、倉内絵里子、長島一哲、砂田翔平、田部学、富樫利恵、坂本幸恵、羽賀陽子、土門素子、小林史絵、佐々木麻実、大場治、正村紀美子、中川俊志・彩紀、荒井一洋・朋子、重徳萌子、野島聡、笠井好美、小竹知子、札幌第一こどものとも社 藤田進、下松谷征子、寺田陽子、宮川健太朗、株式会社山利池上商店 池上智彦、森岡美由希、青木ひろみ・竹鼻真由美・小野木秀子、三國真織、相田智子、高橋美奈、岡田美佳、菅谷公男、渡辺欣也、高橋由美子、山田真由美、宮部直之、柴川明子、浜口由香、宮本千夏、中村桂子、田村美由紀、清野有紀子、南川一了、河田明香、宗石和恵、四釜直美、深林亜希、早水真理子、石川由希、佐藤嶺吏、田中葵惟、橋本千穂、高橋春香、前田由紀、河野和枝、工藤遥、髙田真彰・美波、山田暁子、後藤栄里子、杉麻衣子、永浜厚子、青木雅子、和田明子、片岡正廣、阿部歩、斉藤奈央、鳥井紗枝子、太田さやか、岡村恵子、蓮池藍・真生子、矢野根智晴・絵里子、松原智佳、高氏秀則、猪狩和大・かおり、牧野きよ子、関野奈津紀、遠山景広、佐藤彩未、上野千恵、清水智子、水森優香、松永郁美、佐藤知歩、髙橋和宏・晴香、巽亜矢子、根岸大輔・愛、望月彩瑚、菊地亜希子、鑓水美保、里舘にいな・一成、斉藤曜子、田島裕子、佐々木勝敏、門田愛、斉藤りえ、山口ねぐみ、加藤江里、高橋香代、横谷和美、清家尚子、NPO 法人ねっこぼっこのいえ、宇津木仁子、舟見淳一、高崎友香、大島恵里、佐川もと子、京谷栄一、富田菜都・千絵、野口祥子、森本紗彩、山本結、藤野まゆみ、山下嘉昭、山下泰弘、森明恵、小野寺創、村上紗耶香、岡裕子、白井みゆき、スクリムシャー由己子、川越まどか、因幡咲希、杉原郁美、濱田たみ、黒木陽子、河村みずほ、加瀬奈々、浜栄子、川上麻美、宮崎野歩、髙橋恭子、若林明美、鈴木初恵、片岡朋子、須藤みどり、小森亜紀、虫明美喜、笹渕乃梨、新井健一・万亀、吉岡亜希子、髙橋吾一、早苗麻子、垣屋昌平、北翔大学同窓会淑翠会、中谷通恵・西村篤子・北原美樹、高下洋子、尾﨑奈央、湧田雄基・麻美、笠井真利子、川上康三朗・みちる、山崎政子、松山久子、熊崎果林、大坪恵美、井上かおり、青木雅子、草薙めぐみ、「さっぽろ子育てメッセ」募金箱　＊名前公表を希望しない方のお名前は伏せています
永浜クロス株式会社 永浜哲也（授乳室）、（株）ロハスプロジェクト山田秀俊（工事施工）、田中藍（イラスト・地図）、長嶋晋作・森和恵（引越作業）、関戸啓泰（配線取付）　＊1月に「宮本英樹基金」より 100 万円の寄付をいただく予定です　＊かざぐるま HP にも寄付者一覧のページを作成中

「さっぽろ子育てメッセ 2023」を開催しました♪

2023 年 10 月 14 日(土)北海道学術交流会館にて

主催:NPO 法人子育て応援かざぐるま × 北海道大学大学院教育学研究院乳幼児発達論研究室
協力:札幌市・読売新聞社　＊**「よみうり子育て応援団大賞」**の事業の一環として開催しました → → →

【第 1 部】地域子育て支援拠点発！“地域連携”～地域で孤立しがちな乳幼児親子を、それぞれの多様なニーズに合わせて取りこぼしなく、継続性を持って、親子の生活圏内で包括的に支援してくために

●12 の専門機関・団体の活動紹介＆分散交流会

①子育て世代包括支援センター　②利用者支援基本型・特定型　③児童相談所
④さっぽ・こども広場 ⑤乳児院・児童家庭支援センター ⑥子育てサポートセンター
⑦こども緊急サポートネットワーク　⑧小児科医　⑨助産師　⑩父親支援
⑪DV 被害者支援＆加害者更生プログラム　⑫学習支援

上記 12 団体に資料に基づき 5 分間の概要説明をしていただいた後、興味を持った団体の説明を 15 分×3 回聴きに行く形を取りました。まずは顔の見える関係をつくり、具体的な連携につながること期待します。ご協力ありがとうございました。

【第 2 部】

●基調講演　「今、子どもを育てるということ」　恵泉女学園大学学長　大日向雅美さん

かつて幕末に日本を訪れた外国人は、当時の子育ての様子を見て、「子ども天国・日本」と表しました。それが、今はワンオペ育児と言われるような「孤育て」になってしまいました。今年、こども基本法が施行されましたが、このような法律がつくられなければならないほど、それだけ日本の子育て家庭、そして子どもたちの置かれている現実は厳しいということを現しているのです。

今、政府が掲げる「こどもまんなか社会」の意味を考えるときに、私が真っ先に思い浮かぶのは、ドロシー・ロー・ノルトの『子ども』という詩です。子どもへの大人の対応が、子どもに大きく影響します。2019 年、児童虐待防止法および児童福祉法が改正され、「体罰禁止」となりました。体罰は、子どもへの人権侵害です。叩くなど、大人に対してダメなものが、どうして子どもには許されるのでしょうか。しかし、これに罰則規定はありません。親を罰するのが目的ではなく、子どもを守るために、社会全体で体罰がなくなるよう親を支援することが求められるのです。

オルナ・ドーナトが著した『母親になって後悔してる』が、世界的に大きな共感をよびました。それだけワンオペ育児の苦しみは深いのです。子どもを育てるとは、親と共に生きること、そして子育て支援とは、親の人生支援でもあるのです。また、子どもを育てるとは、皆で子育て・子育ちを支える地域と共に生きることでもあります。

NPO 法人あい・ぽーとステーションでは、子育て家庭への支援事業と並行して、地域の“子育て力”向上のために、人材育成、交流・研修事業も行ってきました。

競争社会から分かち合いの“共生社会”へ。これからも時間はかかるかもしれませんが、“たゆたえども沈まず”の心で、みんなと手を携えて歩んでいければと思います。

●パネルディスカッション

コーディネーター:
北海道大学大学院教育学研究院
子ども発達臨床研究センター准教授　川田学

パネリスト:
札幌市子ども未来局子育て支援部
子育て支援推進担当課長　佐藤あゆみさん
N)子育て応援かざぐるま代表理事　山田智子
N)北海道子育て支援ワーカーズ
代表理事　加藤智恵さん

コメンテーター:
恵泉女学園大学学長　大日向雅美さん

『 子は親の鏡 』　作　ドロシー・ロー・ノルト／訳　石井千春

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる
とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる
不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる
「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ちになる
子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる
親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる
叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう
励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる
広い心で接すれば、キレる子にはならない
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ
認めてあげれば、子どもは、自分を好きになる
見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ

(PHP 文庫「子どもが育つ魔法の言葉」。『子ども』と原文は同じ)

●企画趣旨

こども家庭庁が発足し、こども基本法も施行され、子どもや子育て家族を応援する社会づくりへと機運が高まりつつある中、こどもまんなか社会に向けて札幌市にはどのような課題があり、どのような新しい取り組みや制度が必要なのかについて、行政および民間からの報告をふまえ、大日向先生からのご助言もいただきながら、参加者全体で考え対話する機会とする。

●大日向先生のコメント

札幌市は、国の方針にきめ細やかに対応するには、基礎自治体のやる気とセンスが求められる。
子育て応援かざぐるまは、涙ぐましい努力をし、地域からの本当の声を受けて子育て応援を 37 年継続してきた。かざぐるまが受賞した「よみうり子育て応援団大賞」は 4 人の審査員の総意で決定した。有終の美に相応しい団体。
北海道子育て支援ワーカーズは、つながることを大事に、地域の生活者の観点から活動している。

子育て支援とは何なのか。私は親の人生を応援することと思う。明確や理念を作り上げ、訴えていくことが大切である。自治体は考えなくちゃいけない。みんなで知恵を絞って考えていくことが必要である。

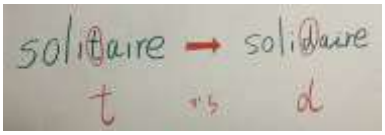
私が親の人生支援を行うに至った背景は、1970 年代のコインロッカーベビー事件。育児不安やノイローゼが原因と考え、母性は本能ではない、3 歳児神話からの解放を訴えたところ、当時は母子関係論に終始していた心理学会から「鬼のような女」と大いにバッシングを受け、この先はどんな社会を目指せばよいのか、研究をつづけた。その後、心理学会から学会の基調講演を依頼された。正しく、「求めよ、さらば与えられん」の境地だった。
子育て支援は「関係性の支援」が大切。子どもを支える力と親を支える力の両方が求められる。

●川田先生のコメント

北大・札幌市・北海道共同の「子どもの生活実態調査」で、ひろばに行きにくいと回答した人は4割。1位は時間が合わない、2位は他の親との関わりが面倒という理由。親と子、地域の関係を築くことは社会の基盤をつくる活動でもある。

●最後のまとめ～各自ひと言

川田先生 「関係性の支援」
佐藤課長 「ともにつながる・ともにつなげる・つながり続ける」
山田代表 「官民協働による地域子育て支援の多機能化。子育てメッセの継続開催」
加藤代表 「笑」っていればなんとかなる。こどももみんなも心から笑える社会に
大日向先生 「solitaire（孤立）から solidaire（連帯）へ」



スペースの関係で大日向先生のお話を中心にまとめました。講演等概要:主催者まとめ

●参加者の感想

○ 大日向先生の「母性は本能ではないから関係性の支援を」、「心あっても霞食っては生きていけない」の言葉が印象的でした。
○ 何かあったら○さんに尋ねようという気づきがうまれ、子どもを取り巻く環境に目を向け続けたいと感じました。
○ 本当にお疲れさまでした。何度も胸が熱くなりましたし、行政との協働の難しさをひしひしと感じました。長年のご苦労と尽力されてきたことが、改めて参加者と確認できたと思います。大日向先生の愛ある言葉の数々が、ほんの少しでも行政側の方々の心にじわっと沁みて、仕事に生かされることを願わずにはおれません。
○ 各機関、団体の現状と課題を知り、今最も検討が急務な課題は持続可能性と感じた。熱意や使命感はもちろん原動力として必須ではある。しかし、継続的な子育て支援の観点から、事業の継続や次世代の支援者育成を考えると、資金や財源の調達、人材の確保が包括的な子育て支援を継続する上で重要かつ急務な課題ではないかと感じた。